



「おばちゃんのエール」 塩田友美子（神奈川県）

私が小学生の頃、ある日急に家にやってきた年配の女性がいた。

親は留守だったので私が対応したら、彼女は牛乳を二本手渡し去っていった。私は牛乳が大好きで、手のひらサイズのビンを何も考えずにぐいっと飲みほした。帰ってきた母が

「この牛乳どうしたの？」

と怪訝な顔をする。

「さっき来たおばちゃんがくれた」

「あんた、そんな誰かもわからない人からもらったもの口にするんじゃない！」
叱られた数日後、彼女はまた我が家にやってきた。

「前の牛乳どうでしたか」

玄関でも二人の会話を陰でこっそり聞いていたら、母は最初とても慎重な対応だった。

「うちはそういうの、いららないんで」





しかし、しばらく二人の会話は続き、やがて笑い声が絶えなくなる。彼女がやっと帰った後母が言った。

「これから週に二回、三本ずつ牛乳来るからね」

結局母は彼女の人柄を認め、我が家は牛乳を運んでもらうことにしたようだ。それからしばし、私が彼女から牛乳を受け取ることがあった。

夕方に来る彼女は一日動き回っているだろうに、いつも元気がよく、ニコニコしていた。

「今日は学校どうだった？」

「運動会頑張ったんだって？」

いつの間にか私は彼女を「おばちゃん」と呼び、親しみを覚えていった。

牛乳のおかげか私の背は、常に後ろから三番までには入るほど伸びていた。反抗期もあり一時はそっけない態度をしたこともあった。しかし、おばちゃんはいつも優しく笑っていた。

私が大学受験をし、実家を出ることになったとき、長い付き合いのおばちゃんにも挨拶をした。





「おばちゃん、私、大学合格したよ！ あの牛乳飲んで徹夜で勉強した甲斐があったかな」

別れの寂しさを和らげるいつもの会話。

そこで、おばちゃんが急に言った。

「おばちゃんね、もうおばあちゃんだけど、昔は応援団やってたのよ！ 今日特別に、あなたにエールを送ります！」

おばちゃんは玄関に荷物を置いて両手を広げた。

「フレー！ フレー！ 頑張れ一人暮らし！ フレー！ フレー！ また会う日まで！」

私はパワフルなおばちゃんに圧倒されながらも涙が出そうになる。

田舎の住宅街に響き渡るようなエールだった。

「あら、近所迷惑だったかしら」

とお茶目に笑いながら、少し目は赤かった。

「今まで本当にありがとうね。おばちゃん」

最後は手を握りしめてお別れを言った。





私は別れの時に初めて、そこにある絆の深さを知った。

その後、実家では牛乳を買うのはやめてしまったらしい。

「あんたのために買っていただいたものだから」

と母は言った。

しかし、今でも私は牛乳が大好きだ。スーパーで買うよりも、おばちゃんが運んでくれたいた牛乳がおいしかった。

今でもたまに思い出す。自分自身が社会に出て、いつでも元気で疲れを見せたことのないおばちゃんを今改めて心底尊敬する。

そしてつらい時は、おばちゃんのエールを心の中で再生する。

私も自分にエールを送り、いつか誰かにエールを送る力を付けたいと日々思っている。

【平成二七年度・佳作】

